国立大学法人大阪教育大学　令和３年度完了報告書

令和３年度「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方」に関する調査研究の完了報告書を次のとおり提出します。

１．調査研究概要

本学は11校園の附属学校を擁し，実践に基づく教育研究ならびに地域の学校への貢献に取り組んでいる。各校園の取組はそれぞれ教育研究会などを通じ発信しているところであるが，実践を同じ尺度で相互に比較し，分析をする試みは不足していた。そこで，本学の附属学校園の中から義務教育課程の３校を選び，それらの学校で行われている特長的な実践をカリキュラム・マネジメントの視点から捉え直し，分析を試みることとした。

小学校段階の「学び上手な子供」を目指した「教科横断的」な実践を通じて養われた個性を大事にする意識やコミュニケーション，ICTの活用能力が，子供のさらに高度な思考に効果を持つためにはどのような課題設定が必要であるかが明らかとなった。また，小学校で培われた力を基礎とした探究活動である「自由研究」において，計画性や創造性，論理的・批判的思考力を養うための指導体制を開発し，各教科の目標をどのように個別最適化された学習と整合させるかという点から指導のポイントを分析している。「安全教育」を柱として学習に取り組んできた小学校では，当初は防犯に視点を置いてきた学習が，防災やネットトラブルなどを含む，多岐にわたるいのちの教育へと変遷していく中で，どのようにして安全科を中心とした授業の充実を図っていくかという試みを振り返り，整理を行った。

いずれの学校における実践も，人的・物的資源を外部資源も含めて活用し，目標に向かって教育内容を組織的に配列し，子供の深い学びを引き出すための改善のサイクルを具現したものである。そのため，成果を公立学校で活用できるよう，手引きの作成に来年度から着手する。

（実践地域における年間実施スケジュール）

月	取組内容
６月	カリキュラム・マネジメント検討会議①（事業計画・役割分担・スケジュール）
７月	
８月	池田地区委員会 天王寺地区委員会
９月	大学教員による実践校視察 ・天王寺地区　附属天王寺中学校：9/13・9/14　自由研究発表会 附属天王寺小学校：9/24（中止） ・池田地区　附属池田小学校：9/22，9/29　安全科
10 月	大学教員による実践校視察 附属天王寺小学校：10/5　チャレンジデー（授業公開） ・池田地区　附属池田小学校：10/29　不審者対応訓練
11 月	カリキュラム・マネジメント検討会議②（各地区委員会活動報告・視察）
12 月	視察　天王寺地区委員会（横浜国立大学教育学部附属横浜中学校） 視察　池田地区委員会 （石巻市立湊小学校，石巻市立釜小学校，宮城教育大学附属小学校） 視察　天王寺地区委員会（山口市立平川中学校，宇部市立上宇部中学校）
１月	
２月	カリキュラム・マネジメント検討会議③（活動報告・次年度事業計画）
３月	

２．調査研究の内容

【実践校：附属天王寺小学校】

（１）研究テーマ

ｂ　学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

（２）調査研究の内容

「教科横断的な学習としての STEAM 教育の実現をめざしたカリキュラム開発」

ア　STEAM 教育で育成される資質・能力

本研究では『各教科等で育まれた力を，当該教科等における文脈以外の，実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てたり，教科等横断的に育む資質・能力の育成につなげたりしていくためには，学んだことを，教科等の枠を超えて活用していく場面が必要となり，そうした学びを実現する教育過程全体の枠組みが必要となる（中央教育審議会 2016.12）』 という指摘に注目し，「資質・能力」を以下のように捉えなおした。

Ⅰ．各教科等において育まれる資質・能力
Ⅱ．教科等を超えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力
Ⅲ．現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力
（参考）中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」pp.28-45（2016.12）

上記より，教科横断的な資質・能力の育成に主に関連するのは，ⅡとⅢであることを確認した上で，Ⅰがその不可欠な前提であることを全体で共有した。これにより，一方で教科横断的であり，他方で基盤としての教科の学力が重要であるという STEAM 教育の特色の理解につながった。

また STEAM 教育の目的は，「科学・技術分野の経済的成長や革新・創造に特化した人材育成」「複雑に関係する現代社会に生きる市民の育成」であるが，小学校段階では目標に距離があることから，本研究ではめざす子供像を「学び上手な子供（知的な初心者）J.T.ブルーアー」として焦点化した。更に育成の視点を「メタ認知」「感性」「挑戦意欲」とし，指導の重点として授業開発を行うことができた。

イ　教科横断的カリキュラム開発の視点

本研究では，松原（2017）の知見である以下の教科の統合度を踏まえ，教科から STEAM 教育にひらかれた単元開発を行った。

各教科個別の学習	“Disciplinary”アプローチ ＊本校通称：教科アプローチ	各教科で個別に概念とスキルを習得/活用する。
統合の度合い 低い	“Thematic”アプローチ ＊本校通称：テーマアプローチ	共通のテーマに関して，各教科で個別に概念とスキルを習得/活用する。
↑	“Interdisciplinary”アプローチ ＊本校通称：インターアプローチ	共通のテーマに関して，複数教科で関連/共通の概念とスキルを習得/活用する。
↓ 高い	“Transdisciplinary”アプローチ ＊本校通称：トランスアプローチ	実世界に関わる課題/現代的な諸課題に関して，複数教科で関連/共通の概念とスキルを活用し，学習経験を形成する。

令和３年度研究では，６２の研究授業を通して，教科の統合度に応じた学習活動，目標の具体化の検討を進めることができた。「教科アプローチ」「テーマアプローチ」では［学習内容分析の適否，教材選定の意図の明確化，発問の検討］など，従来の授業研究でも重視されてきた課題について検討を行うことができた。

また「インターアプローチ」「トランスアプローチ」では，［教科の学力の転移の有無，子供の主体的な探究活動を誘う課題/活動の検討，複数教科に関連/共通する概念・スキルの設定の適否］など，教科横断的な学習ならではの課題についての検討を進めることができた。

ウ　「タキソノミーテーブル」を用いた目標の明確化

本研究では，各教科の資質・能力（領域固有の学力）と教科横断的な資質・能力（汎用的な学力）の関係を整理するために，「改訂版タキソノミー（Revised Bloom's Taxonomy)」(以下RBT）の知見を下に目標を明確化した。RBTでは，次の表のように知識と認知過程が二次元的に構造化し，「タキソノミーテーブル」として，階層的に配列されている。

知識次元	認知過程次元					
	１．記憶する	２．理解する	３．適用する	４．分析する	５．評価する	６．創造する
A.事実的知識						
B.概念的知識						
C.手続き的知識						
D.メタ認知的知識						

令和３年度研究では，６２の研究授業を通して，「D. メタ認知的知識」「4. 分析する，5. 評価する，6. 創造する」の具体化の検討を進めることができた。「D. メタ認知的知識」を働かせるためには，学習問題の理解だけではなく，学習問題設定の意図も理解する必要があり，「なぜ〇〇なのか」といった子供の疑問をより重視することが共有された。また「4. 分析する，5. 評価する，6. 創造する」のレベルまで子供の思考を働かせるためには，生活経験と関連していたり，現実的な諸課題に関連していたりと，学校での学びを拡張するような学習課題であることや，自立的自主的な学習活動の設定が重要であることが共有された。

（３）調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

本研究では，CCEJ（Checklist for Curriculum Evaluation in Japan）を用いて，カリキュラム・マネジメント評価を行った。CCEJ は，「記述」「背景」「消費者」「資源」「価値」「過程」「結果」「コスト」「比較」「一般化可能性」「意義」「改善点」「報告の機会」「メタ評価」の全14 項目に対する自己評価を自由記述する方法であり，評価者の判断の重視，および簡便さに特色がある。全員が研究授業を行い，カリキュラム開発に携わるという本校の特色をふまえ，評価者の判断が反映される CCEJ を採用した。また各自の自由記述をデータとし，テキストマイニングにより分析を行うことで主観的データの一般化を行った。

授業者のカリキュラム評価が端的に表れる［意義］に関わる自由記述についてテキストマイニングを行い，その特徴的な抽出語をもとに，本研究の成果と課題を述べる。

名詞ハイスコア	児童 42.31　一般化 17.29　ICT 17.29
動詞ハイスコア	関連付ける 3.12　位置付ける 2.62 取り組む 2.13
形容詞ハイスコア	働きにくい 3.93　高い 0.02 面白い 0.02

本校のSTEAM教育実践の成果は，「児童の多様な個性をいかたしこと」「ICTを活用し，新たな児童同士のコミュニケーションを創出できたこと」，「他教科の学びを関連付け，位置付けたこと」である。特にICTの活用は，ギガスクールの推進状況とあいまって，汎用性もあり一般化可能である。課題は，小学生にとって，一般的にメタ認知能力が未熟であり，他者意識が働きにくく，それが児童の問題意識の喚起や共同学習促進に困難さをもたしたことである。改善策は，教員による適切なフィードバックの実現である。そのために次年度はSTEAM教育の評価に研究を重点化する。

（４）実践校における年間実施スケジュール

<table>
<tr><th>月</th><th>取組内容</th></tr>
<tr><td>４月
５月</td><td>〇STEAM 教育研修【PLAN】
新転任教員を含む，教員全体で STEAM 教育を理解するため，研究部より昨年度研究の成果と意義を説明するとともに，「OECD　Education2030 プロジェクトが描く教育の未来（ミネルバ書房)」「令和の日本型学校教育の構築を目指して（文部科学省)」を課題図書とし，そのねらいや実践上の課題について検討した。STEAM 教育の観点から年間カリキュラムを再考するために，各領域部会において教科横断的な活動，現代的な諸課題に関わる活動を検討し，以下７つの活動を新たに計画し，年間カリキュラムに位置付けた。
<table>
<tr><td>トリオタイム</td><td>読み書きタイム</td><td>算・プロタイム</td><td>出前授業年間計画</td></tr>
<tr><td>畑栽培計画</td><td>スポーツウイーク</td><td>アートウイーク</td><td></td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>６月
７月</td><td>〇STEAM 教育の実現のための研究計画【PLAN】
2021.2「教育課程研究指定校事業研究協議会発表」で指摘された課題「インターアプローチ，トランスアプローチの授業実践の少なさ」「学び上手な子供の発達段階の違い」「カリキュラム全体の資質・能力の関連」を踏まえ，インターアプローチ，トランスアプローチの授業開発の視点や方法，「RBT と学年の発達段階，教科の統合度の相関」を検討した。</td></tr>
<tr><td>８月</td><td></td></tr>
<tr><td>９月</td><td>〇第１期チャレンジウイーク（～9／3）…研究授業週間【DO】
教育実習生指導を見据えて，基本となる指導案の書き方を学ぶことを目的とし，教科アプローチを中心に授業を実施した。
<table>
<tr><td>教科アプローチ</td><td>１８授業実施</td><td>テーマアプローチ</td><td>１授業実施</td></tr>
<tr><td>インターアプローチ</td><td>３授業実施</td><td>トランスアプローチ</td><td>０</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>10 月</td><td>〇チャレンジデー（10/5）【DO】【CHECK】
本学，カリキュラム・マネジメント天王寺地区委員会委員による授業参観と授業高評。本校の今年度カリキュラム・マネジメントの課題と方向性を学んだ。
<table>
<tr><td>教科アプローチ</td><td>０</td><td>テーマアプローチ</td><td>９授業実施</td></tr>
<tr><td>インターアプローチ</td><td>７授業実施</td><td>トランスアプローチ</td><td>１授業実施</td></tr>
</table>STEAM 授業の構想を可視化する「コンセプトシート」の提案，作成。</td></tr>
<tr><td>11 月</td><td>〇第２期チャレンジウイーク（～11／25）…研究授業週間【DO】【CHECK】
インターアプローチ（5 授業実施)，トランスアプローチ（1 授業実施）の授業を実施</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td>し，研究会議において全員でその一般化可能性や意義を検討した。</td></tr>
<tr><td>12 月</td><td></td></tr>
<tr><td>１月</td><td></td></tr>
<tr><td>２月</td><td>〇第 3 期チャレンジウイーク（現在）…研究授業週間【DO】【CHECK】
令和 3 年度の集大成としての STEAM 教育授業の実施。
<table>
<tr><td>教科アプローチ</td><td>0</td><td>テーマアプローチ</td><td>9 授業実施</td></tr>
<tr><td>インターアプローチ</td><td>7 授業実施</td><td>トランスアプローチ</td><td>1 授業実施</td></tr>
</table>
〇CCEJ を用いて，カリキュラム評価を行い，その成果と課題を明確化し，次年度の研究の方向性を検討する。</td></tr>
<tr><td>３月</td><td>〇オンラインにて，本校 STEAM 教育実践の発表【ACTION】
〇カリキュラム開発に関わるリーフレット作成【ACTION】</td></tr>
</table>

【実践校：附属天王寺中学校】

（１）研究テーマ

c　現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）調査研究の内容

ア　目的

1947年の開校以来取り組んでいる「自由研究」の指導体制を，令和元年度より完全ゼミ制に移行したことに伴う成果と課題の所在を明らかにすること。

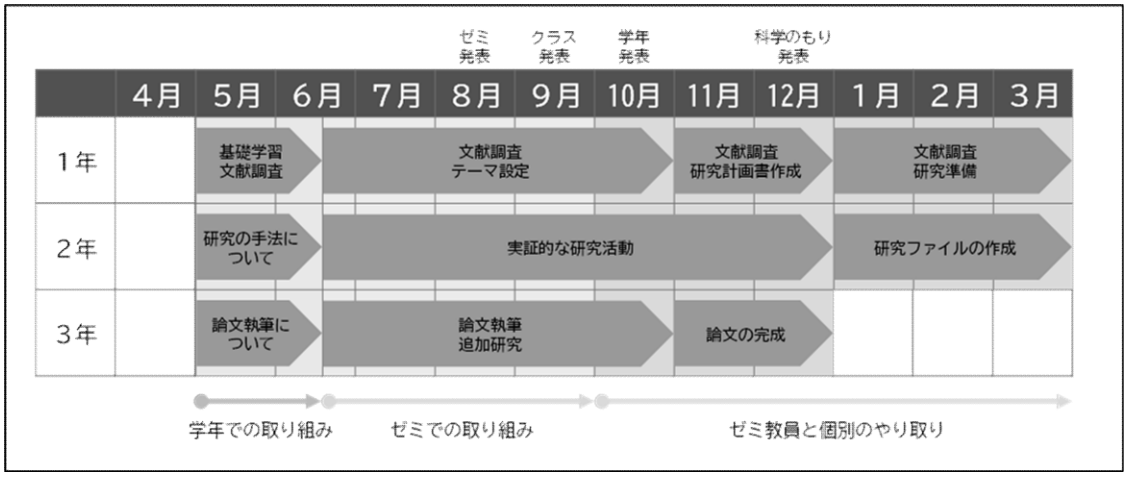
イ　指導目標

①３年間の中で段階を経て，生徒自らが問題を見い出し，研究テーマを決定し，企画・研究することによって，各自の計画性や創造性，論理的・批判的思考力を養う。いわゆる探究の過程の経験を通して，学び方や考え方を身につける。

②研究成果の発表や他の生徒の発表を聞くことを通して，発表の技術や態度を向上させる。

ウ　指導課程

次のスケジュールに示した通りである。



エ　研究成果の蓄積と発表

①自由研究ファイル

自由研究ファイルに３年間の研究のすべてを書き込ませていく。全てのゼミにおいて，生徒に求めるページ数は累計５０頁以上を目標とし，参考文献には少なくとも４つ以上の専門書，または論文を含めることとする。ゼミ教員は少なくとも１年生と３年生で回収し，中身の確認を行う。

②研究論文［３年生のみ］

３年生では，３年間の研究の集大成として自身の研究を論文にまとめさせる。研究論文はＢ５用紙６枚～８枚とする。研究論文作成の前段階として，生徒はアウトライン用紙（論文骨子）を７月までに作成する。アウトラインを完成させた生徒から，執筆要領に従って研究論文を作成する。特にパラグラフライティングを意識させるように指導する。提出された研究論文の中から特に優秀なものを１２本程度選び，研究冊子に掲載する。

③口頭発表

全学年とも，パワーポイントやgoogleスライドなどのプレゼンテーションソフトを使用する。ゼミ発表会 ➠ 自由研究発表会（学級にて全員発表）➠ 学年発表会（代表者８名）の流れで発表の場を設定する。一人あたり発表７分+質疑応答・評価２分の計９分とするが，ゼミ発表においては，各ゼミで発表のあり方を設定するものとする。

（３）調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

下図左は，自由研究に関する生徒のアンケートから一部抜粋したものである。多くの生徒に共通していたことは，「自分で調べることの大変さを知ると同時に，その面白さに気づくことができた」ということである。３年間継続することで，ただやらされるだけの活動ではなく，好きなことを自分で探究していく楽しさや面白さを，徐々に実感できるようになっていたのではないかと考えられる。

下図右は，向井大喜（天王寺地区委員）による分析結果である。これまでの自由研究活動に満足しているかどうか，「全く満足していない」を１，「とても満足している」を６としたとき，満足度を１～６の間で選ばせた結果をまとめたものとなっている。これにより，およそ８割の生徒は満足度が高い。しかし，言い換えれば２割の生徒は，自由研究に対してネガティブな感情を抱いており，この２割の生徒をどのように指導し，意義のある取り組みへと改善できるかが今後の大きな課題の一つといえるだろう。

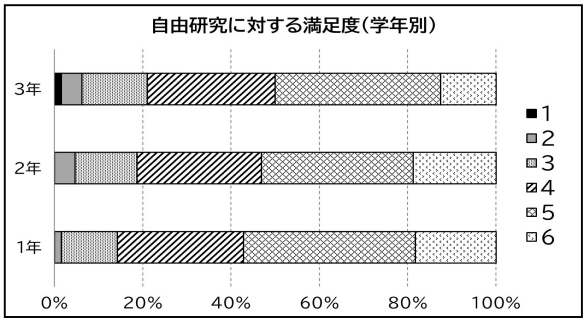
教員の指導力は，ゼミ指導に顕著に反映される。探究活動のノウハウを十分にもっている教員もいれば，探究活動の指導経験が少ない教員もいる。このような状況が生じることは，ある

生徒のアンケート・感想から

研究テーマについてはそれほど自分の興味のないものを1年の時に選んでしまったのだが、研究を進めるうちに興味深さに気づき、どんどんそのテーマが好きになっていった。それによりテーマ関連の事はとてもたくさん学ぶことが出来た。さらに、発表の機会が多いので、効果的な発表の仕方・喋り方なども学ぶことが出来た。

普段、一つの物事に集中して深めていくことはなかったが、この自由研究活動を通して、一つの研究をやり通す大変さやたくさんの情報をまとめる方法など、たくさんのことを学んだ。

令和３年度自由研究アンケートより



本校生徒の自由研究に対する満足度

程度仕方のないことではあるが，よりよい活動にしていくためにも，今後の方向性や指導の在り方について，研修や交流を行うことは十分意義のあることだと考えられる。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
４月	
５月	１年：基礎学習　２年研究手法についての指導　３年：論文執筆についての指導
６月	１年：文献調査およびテーマ設定指導 ２年：実証的な研究活動の指導・支援 ３年：論文執筆および追加実証活動の指導・支援
７月	各学年：６月の内容の継続
８月	各学年：６月の内容の継続，各学年において生徒による口頭発表
９月	各学年：生徒による口頭発表
10 月	各学年：生徒の到達度に応じた個別指導
11 月	各学年：生徒の到達度に応じた個別指導 １年：次年度の計画書作成指導 ３年：論文作成の指導
12 月	11 月の内容の継続 ３年：論文の完成，自由研究活動の終了
１月	
２月	１年：文献調査の継続と実証的研究の準備 ２年：研究ファイル（データベースノート）の作成
３月	２月の内容の継続

【実践校：附属池田小学校】

（１）研究テーマ

a　学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

（２）調査研究の内容

ア　安全教育を実施する必要性

平成13年６月８日，本学附属池田小学校（以下，附属池田小）に一人の暴漢が侵入した。８人の児童が亡くなり，１５人の児童，教員が負傷した。附属池田小においては事件後，安心して日々の教育活動ができるよう心の教育に取り組むとともに，平成16年以降，総合的な学習の時間において，安全教育を一つの柱として学習に取り組み，当初は防犯に視点を置いた学習を中心に進めてきた。

東日本大震災以後，防災教育の重要性が高まるとともに，ネット環境の著しい発達により子どもたちが犯罪に巻き込まれたり，子ども同士でトラブルになったりする事例も増加してきており，当初の内容よりも多岐にわたる安全教育が求められるようになってきている。これら安全教育の根底にあるものは，いのちの教育であり，附属池田小では，生命尊重を基盤

とした教育の実践研究，発信に努めてきた。

また平成27年にはセーフティプロモーションスクールに認証され，安全教育のみならず安全管理や地域や関係機関との安全連携等の推進をより一層担う立場ともなった。

現行の小学校学習指導要領にも，特別活動に「事件や事故，災害等から身を守る」との内容が示されており，安全教育の充実が今まで以上に求められていく中で，附属池田小の取り組みが全国の学校の教育に役立つよう引き続き安全科を中心とした授業の充実を図っていくことをねらいとしている。

イ　実施状況

平成２１年に教育課程特例校に指定され，実施していた安全科は，当初は生活，特別活動，総合的な学習の時間の一部を組み換え，各学年年間３５時間の実施を行っていた。しかしながら，各教科・領域においても安全にかかわる内容が扱われており，安全科の内容と重複することも少なくなかった。また，教科書もない中で，安全の授業を毎週１時間実施することは極めて難しいものであった。理科では地震・噴火，社会科では自然災害への対応，特別活動では避難訓練など安全や防災に関わる行事などを学んでおり，各教科・領域には，安全教育として取り上げることが可能な内容が多く含まれている。それらをカリキュラム・マネジメントして安全教育として位置づけることによって総合的に児童が学べるように改善を進めてきた。ネット被害，熱中症，薬物，危険生物，食中毒，食物アレルギー等，事件当時には思いもしなかった内容も含めている。

また，安全教育の普及を図るうえでも，新たに特別なことを作り上げるというのであれば各校の負担も大きいが，すでに取り組んでいる教育活動を安全教育の視点で見直す作業であれば，ハードルも低く取り組みやすいのではないかという考えもあった。このような経緯をふまえ，昨年度に作成した別途資料のカリキュラム表をもとに安全教育を実践し，その検証を行った。また，今年度は，これまでの安全科や安全管理に関わる取組を全国に発信するため，安全教育のカリキュラムや授業案，学校安全の手引き，不審者対応訓練の動画などをまとめた「学校安全 Home Page」を立ち上げることができた。

さらに，昨年度から今年度にかけては安全科の内容として，個人情報に関わって「交通系 IC カード」や「身の回りにある個人情報」，「災害発生後の避難所での行動」，「データ分析によるいじめへの対応」等を取り上げ，校内での研究を深めた。

（３）調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

安全科等の学習によって，本校の児童が身の回りの様々な危険を知り，その危険に対処する方法を学ぶこと，および自他の生命を尊重し，安全な社会の形成者となることを目標としている。本校での児童対象学校教育診断において，８割以上の児童が「安全科」の授業について「楽しい」「どちらかといえば楽しい」との肯定的な思いを持っている。これは，安全指導ではなく，自分たちで身の回りにある危険の回避について考えることができる授業方法が，児童たちの主体性を生んでいるからと考える。一方，児童たちに忍び寄る危険は，社会状況の変化のため多岐に及んでいる。引き続き，社会の実態に応じてカリキュラムを変更し，その効果を検証していく必要がある。

また，今年度は宮城県への視察を行い，東日本大震災で被災した２校と，カリキュラム・マネジメント研究校１校を訪問した。被災校からは学校が地域社会の安全を推進する担い手となるべく関係機関との連携を進めている様子や，地域人材を生かした防災カリキュラムの構築の

状況を学ぶことができた。カリキュラム・マネジメント研究校からは，教科を超えた横断的な視点で，評価の観点として共通理解を図って資質能力（言語力，問題解決能力，活用力，表現力，調整力）をもとにした研究の手法について学ぶことができた。

課題の改善のための取組の方向性として，先に示したような課題を踏まえて，社会状況を敏感に感じ取り，臨機応変にカリキュラムを変更していく学校体制を構築していく。また，授業においては，フィールドワークの回数を増やしたり，各関係機関が作成しているコンテンツなどを効果的に利用したりしていくことで，児童がより実感を伴った理解をすることができるようにしていくことを検討していく。また，視察から得られた知見を引き続き本校の研究に生かしていくことも必要であると考えている。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
４月	安全教育カリキュラム表の学校全体での共通確認を図る
５月	・カリキュラムにもとづいた安全教育の実践
６月	※６月８日「祈りと誓いの集い」に向けた安全教育
７月	
８月	
９月	
10 月	
11 月	
12 月	・視察　池田地区委員会 （石巻市立湊小学校，石巻市立釜小学校，宮城教育大学附属小学校）
１月	・視察報告 ・各学年　地震への対応について
２月	・「学校安全 HomePage」を web 上に立ち上げ，安全教育のカリキュラム等これまでの取り組みの発信を行う。 ・26 日　オンラインでの「令和 3 年度大阪教育大学附属池田小学校研修会」を実施し，安全科の授業の提案を行う。
３月	・来年度に向けたカリキュラムの見直し

３．実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（○：成果，●：課題）

○各校で実践されている特長的な取り組みを，カリキュラム・マネジメントという視点からあらためて検証する機会となった。学校の資源をどのように再配置するか，集中させるかということを考える起点となった。

○調査した限りにおいては，８割の生徒が特長的なカリキュラムに対して肯定的な受け取り方をしていることが明らかになった。

○附属学校という特性をふまえ，特に若手の大学教員と現場との連携を促進し，協働した教育研究をさらに進めていくための素地を作ることができた。

●特長的なカリキュラムを実施することが，教員の負担となる可能性がある。

〈改善方策〉
　カリキュラム・マネジメントを進めることにより，資源の再配置と集中を検討し，働き方改革の一助ともなるよう進めていく必要がある。
●附属学校の使命として公立学校への貢献が求められるが，実践校の取組が特別な環境に依存して成立していると考えられがちである。
〈改善方策〉
　取組をそのまま移転することを考えるのではなく，取組の中で活用できる要素を取り出して参照しやすいような手引きを作成する。

４．参考資料

【必須】

①実践地域の取組の概要が分かるもの
②カリキュラム・マネジメント検討会議の資料